

地域における子どもの健全育成に関する研究

— 生活拠点の再構築を視点に —

児童家庭福祉研究部	高橋 種 昭 ・ 須 永 進
母子保健研究部	加 藤 忠 明
淑徳短期大学	中 川 英 一 ・ 高 林 孝 志
善福寺北児童館	小 林 千 鶴 子

要約：

近年、子どもを取り巻く環境の変貌は、子どもの生活に大きな影響を与えた。特に、地域に生きる子どもの、集団や遊びの変容は子どもの成長と発達に極めて深刻な状況をもたらしている。本研究では、こうした今日の子どもの生活＝遊びを見直し、新たな方向性を求めるためのものである。今回は、地域の集団づくり、子どもへの遊び拠点としての児童館活動に焦点をあて、現状の把握と課題について調査・考察することにした。

まず、東京の公立児童館4館を利用する児童を対象に、質問紙によって児童館活動と子どものニーズに関して調査を実施した。その結果子どもにとって、自由に友達と遊べる場としての評価が得られた一方、児童館活動と児童のニーズとの間にいくつかのギャップのあることが判明した。また、先駆的に子どもの集団づくりと地域活動を進めている近畿地方にある児童センターを視察、多くの示唆を得ることができた。

見出し語：子どもの生活、児童館、集団づくり

A Study on Sound and Healthy Upbringing in a Region

Taneaki TAKAHASHI, Susumu SUNAGA
Tadaaki KATOH
Eiichi NAKAGAWA, Takashi TAKABAYASHI
Chizuko KOBAYASHI

The changes of the environment for the children had a great influence on their life in the recent years. For the children live in the community, the change brought severe situation to their growth and healthy development. To seek the new future course through this study, We surveyed and considered about the understanding of today's situation and subjects to focus on the activities of the Children's Center in Tokyo. We questionaired about the Center's activities and children's needs. We got the results that many of them enjoyed the playing with friends free there, but also had gaps between the Center's events and their needs. In addition, we visited the Children's Center in Kinki District and got lots of suggestions for future there.

Key Words : Child life, Children's Center, Grouping

1. 研究目的

近年、子どもを取り巻く環境の変貌は著しく、子どもの生活全体を大きく変えるほどに至っている。と同時に、地域社会と子どものかかわりにおいても、稀薄化と孤立化の進行によって、子どもの健全な成長に少なからず影響を与えているといわれている。

本研究は、こうした現況をふまえつつ、子どもの生活基盤である地域社会の役割や機能、とりわけ地域と子どもの接点で、重要な役割を担っていると考えられる児童館とその活動に焦点をあて、子どもにとっての生活拠点として、また子どもの健全育成に果すべき役割や今後の課題などについて調査、検討することを目的としたものである。

2. 研究方法

今回は、研究の最初の段階であるので、まず東京都内の典型的な公立の都市型の地域児童館4ヶ所と、奈良県で極めてユニークな活動を行っている民間の児童館1ヶ所を対象に調査を行い、その活動の実態について把握することにした。

1) 東京都における調査

東京都における調査は、都内の山の手地区と考えられるM区の4ヶ所の児童館において、調査員による学童を対象にした面接質問調査を行うと共にその活動の状況をVTRにとり記録した。面接質問調査の質問項目は次の如きものである。

- 来館児童の年齢、性別、家族構成
- 週あたりの来館回数
- 児童館で楽しいこと

表1 対象児童の年齢

年齢 館	6 歳	7 歳	8 歳	9 歳	10 歳	11 歳	12 歳	13 歳	14 歳	15 歳	計
A	8 (14.3)	15 (26.8)	8 (14.3)	6 (10.7)	8 (14.3)	4 (7.1)	4 (7.1)	3 (5.4)	-	-	56
B	1 (2.0)	2 (4.1)	19 (38.8)	14 (28.6)	4 (8.2)	2 (4.1)	5 (10.2)	2 (4.1)	-	-	49
C	-	14 (31.1)	11 (24.4)	3 (6.7)	5 (11.1)	5 (11.1)	-	-	-	7 (15.6)	46
D	-	9 (36.0)	6 (24.0)	6 (24.0)	4 (16.0)	-	-	-	-	-	25
合計	9 (5.1)	40 (22.9)	44 (25.1)	29 (16.6)	21 (12.0)	11 (6.3)	9 (5.1)	5 (2.9)	-	7 (4.0)	175

- 異年齢の子どもとの交流
 - いつも遊ぶ相手の数
 - 行事への参加
 - 児童館に行くことによる友達の数の変化
 - 日常の遊び場所
 - 学習塾・けいこ事などに通うことの有無
 - 日常の遊び相手
 - 児童館への希望
 - 日常生活の中で一番楽しい場所
- なお調査時期は1991年8月である。

2) 奈良県における調査

奈良県における調査は、N市の中心地区にある民間の社会福祉法人により設立されたH児童センターを対象にし、現地に調査員を巡遊し、その活動状況を見学すると共に、職員に面接調査を行った。

3. 調査結果

調査1) について

今回調査を行ったM区の児童館は、皆いわゆる住宅地区の中にある児童館であり、その規模も同じ型の地域児童館である。児童館の館名はA B C Dの記号で記すことにする。

対象児童数	
A児童館	56名
B児童館	49名
C児童館	45名
D児童館	25名
計	175名

◦対象児童の年齢(表1)

調査対象となった来館児童の多くは、小学校低学年児

童であるが、10歳以上の高学年の学童も2割以上みられ、必ずしも児童館に来館する児童は低学年のものばかりとはいえない。C児童館の場合など15歳の中学生が7名も含まれている。

○男女別（表2）

表2 男女別

館	性	男 児	女 児
A		22 (39.3)	34 (60.7)
B		25 (51.0)	24 (49.0)
C		25 (55.6)	20 (44.4)
D		8 (32.0)	17 (68.0)
計		80 (45.7)	95 (54.3)

男女別にみると、男児、女児大体半々の割合であり、大きな偏りはみられない。しかし、館によっては片方の性に偏っている所もあり、D館の場合など女児が男児の約2倍もの数である。この違いは、館の側の受け入れ体制なり、条件によってもたらされたものか、地域性によるものかは不明であるが、地域性に違いがあまりみられない今回の調査対象のことを考えると、やはり児童館の受け入れ条件によるものと考えるのが妥当のように思える。

○調査対象児童の家族数（表3）

4人というものが約半数を占め、3人と5人のものが次いで多く、6人以上の家族のものは1割強という少ない数である。この数字は東京都の住宅地域ということを考えれば当然の結果であろう。要するに核家族が殆んどということである。

○きょうだい数（表4）

2人のものが過半数を占め、他はひとりと3人が各々2割であり、4人以上のきょうだいのものは175名中僅か4名という少ない数である。

○週あたりの来館回数（表5）

殆んど毎日来るといえるものが約半数と多く、いわゆる

常連の子どもの多いのが目立つ。週に1～2回しか来ないものは約2割強という数字で、子ども1人当りの来館回数は多いといえよう。

○児童館で楽しいこと（表6）

子どもが児童館に来て楽しいことをあげさせた結果が表6である。

友達と遊べることをあげるものが1館を除き最も多い。その他では自由に遊べる、遊び道具がいろいろあるなどが多いが、その数には館による違いがかなりみられる。例えば、自由に遊べるという答のものがA児童館の場合は圧倒的に多いが、B児童館では僅か2名に過ぎない。又、遊び道具がいろいろあるという答のものも、D児童館では約3割という数字であるが、C児童館では僅か4%という数字である。こうした数字からも児童館の活動や設備の内容により、子どもの館への期待もかなり異なることが判る。

表4 きょうだい数

館	人数	1 人	2 人	3 人	4 人
A		13(23.2)	38(67.9)	5(8.9)	—
B		10(20.4)	23(46.9)	12(24.5)	4(8.2)
C		8(17.8)	26(57.8)	11(24.4)	—
D		6(24.0)	11(44.0)	8(32.0)	—
計	175	37(21.1)	98(56.0)	36(20.6)	4(2.3)

表5 週あたりの通館回数

回数	ほとんど行かない	1～2回	3～4回	ほとんど毎日	わからない
A	4(7.1)	8(14.3)	12(21.4)	28(50.0)	4(7.1)
B	2(4.1)	23(46.9)	1(2.0)	22(44.9)	1(2.0)
C	2(4.4)	8(17.8)	17(37.8)	15(33.3)	3(6.7)
D	—	5(20.0)	5(20.0)	15(60.0)	—
計	8(4.6)	44(25.1)	35(20.0)	80(45.7)	8(4.6)

表3 家族数

館	人数	2 人	3 人	4 人	5 人	6 人	7 人	8 人
A (56)		—	10 (17.9)	33 (58.9)	9 (16.1)	3 (5.4)	1 (1.8)	—
B (49)		2 (4.1)	5 (10.2)	18 (36.7)	12 (24.5)	10 (20.4)	1 (2.0)	1 (2.0)
C (45)		—	11 (24.4)	19 (42.2)	8 (17.8)	5 (11.1)	2 (4.4)	—
D (25)		1 (4.0)	5 (20.0)	12 (48.0)	6 (24.0)	1 (4.0)	—	—
計 (175)		3 (1.7)	31 (17.7)	82 (46.9)	35 (20.0)	19 (10.9)	4 (2.3)	1 (0.6)

表6 児童館で楽しいこと

館	友達と遊べること	好きな本が読める	友達と話をできる	自由に遊べる	遊び道具がいろいろある	行事に参加できる	来館しやすい	その他
A	10 (17.9)	5 (8.9)	-	21 (37.5)	6 (10.7)	3 (5.4)	2 (3.6)	9 (16.1)
B	24 (49.0)	2 (4.1)	-	2 (4.1)	11 (22.4)	6 (12.2)	-	4 (8.2)
C	21 (46.7)	1 (2.2)	-	6 (13.3)	2 (4.4)	-	7 (15.6)	8 (17.8)
D	8 (32.0)	-	1 (4.0)	6 (24.0)	8 (32.0)	1 (4.0)	-	1 (4.0)
計	63 (36.0)	8 (4.6)	1 (0.6)	35 (20.0)	27 (15.4)	10 (5.7)	9 (5.1)	22 (12.6)

○異年齢の子どもとの遊び (表7)

表7 異年齢の子と遊ぶかどうか

館	よく遊ぶ	あまり遊ばない	わからない
A	43 (76.8)	13 (23.2)	-
B	25 (51.0)	24 (49.0)	-
C	33 (73.3)	11 (24.4)	1 (2.2)
D	14 (56.0)	11 (44.0)	-
計	115 (65.7)	59 (33.7)	1 (0.6)

大体半数以上、館によっては7割以上のものが児童館で異年齢の子どもとの遊びを行っている。しかし、この場合もその数字は館により異なり、B児童館の如く約半数のものは遊ばない、というような結果がみられるケースもあり、必ずしも全ての児童館で異年齢集団の子どもの遊びが活発に行われているとはいえないのが現状であろう。今回このような結果がみられたにしても、地域での異年齢集団の子どもの遊びがみられなくなった今日においては、児童館における異年齢の子どもとの遊びは非常に大きい意義をもつものであり、今後一層こうした種類の遊びが行えるような環境整備がなされる。

○よく遊ぶ相手 (表8)

表8 「よく遊ぶ」場合、相手は

館	年上の子	年下の子	両方	わからない
A	12(27.9)	12(27.9)	18(41.9)	1(2.3)
B	5(20.0)	6(24.0)	14(56.0)	-
C	7(21.2)	9(27.3)	17(51.5)	-
D	7(50.0)	5(35.7)	2(14.3)	-
計	31(27.0)	32(27.8)	51(44.3)	1(0.9)

やはりこの場合も館によって他と異なる傾向がみられる。例えば、D児童館の場合など、年上の子どもと遊ぶものが他の館より多く、年長と年少の子どもの両方の子どもと遊ぶというものも他の館に比べて著しく少ない。このD館の場合は、何らかの条件の違いがあるためにこうした結果がみられたと考えられる。

○遊び相手の数 (表9)

表9 何人の人と遊びますか

館	自分ひとりで	友達と二人	3~4人	5人以上
A	2(3.6)	7(12.5)	17(30.4)	30(53.6)
B	1(1.0)	19(38.8)	14(28.6)	15(30.6)
C	1(2.2)	4(8.9)	18(40.0)	22(48.9)
D	1(4.0)	7(28.0)	16(64.0)	1(4.0)
計	5(2.9)	37(21.1)	65(37.1)	68(38.9)

児童館での遊び相手の数についても同様に館によるばらつきがみられ、5人以上と答えたものが全体的にみれば多いが、B児童館の如く2人という答えのものが最も多い館もある。

○児童館の行事への参加 (表10)

児童館においては、いろいろな種類の行事が年間を通

表10 行事の参加

館	よく参加する	楽しい行事のみ	あまり参加しない	わからない
A	24(42.9)	11(19.6)	20(35.7)	1(1.8)
B	25(51.0)	14(28.6)	10(20.4)	-
C	11(24.4)	12(26.7)	22(48.9)	-
D	11(44.0)	3(12.0)	10(40.0)	1(4.0)
計	71(40.6)	40(22.9)	62(35.4)	2(1.1)

表11 児童館の行事にあまり参加しない理由（62名対象）

答 館	時間がない	楽しそうな 行事がない	友 達 が 遠 い	遠 い	わからない	不 明
A	2 (10.0)	15 (75.0)	-	1 (5.0)	2 (10.0)	-
B	4 (40.0)	3 (30.0)	-	-	2 (20.0)	1 (10.0)
C	9 (41.0)	6 (27.3)	-	2 (9.0)	-	5 (22.7)
D	1 (10.0)	7 (70.0)	-	-	1 (10.0)	1 (10.0)
計	16 (25.8)	31 (50.0)	-	3 (4.8)	5 (8.1)	7 (11.3)

じて行われているが、そうした行事によく参加すると答えたものは約4割であり、かなり多くの子どもが行事に参加している。しかし、あまり参加しない、というものも館によっては多く、C児童館の場合、あまり参加しないというものがよく参加するものの約2倍もの数であり、行事への参加率は極めて低い。

○行事に参加しない理由（表11）

あまり児童館の行事に参加しないと答えた子どもに、その参加しない理由について聞いてみた結果が表11であるが、その結果をみると、楽しそうな行事がないという答えが半数を占めている。その他では、時間がない、というものが2割強みられ、子どもの多忙な生活ぶりがうかがわれる。

○児童館に行くことにより友達数の変化（表12）

児童館に行くことによって友達の数が増えたというものが約60%と断然多く、児童館が子ども達の友達の幅を広げるのに役立っていることは明らかである。否定

表12 児童館に行くようになって友達が多くなりましたか

答 館	はい(多 く な った)	い い え	かわらない	わからない
A	23(41.1)	2(3.6)	31(55.4)	-
B	30(61.2)	-	18(36.7)	1(2.0)
C	33(73.3)	1(2.2)	11(24.4)	-
D	17(68.0)	-	8(32.0)	-
計	103(58.9)	3(1.7)	68(38.9)	1(0.6)

的な答えは殆んどみられない。このことは児童館の活動がその本来の使命をかなり果しているともいえよう。

○日常の遊び場所（表13）

児童館に通って来ている子ども達の児童館以外の遊び場所についてみてみると、この場合も館による違いがかなりみられる。山の手の住宅地域といっても、家庭環境

表13 遊ぶ場所（児童館以外の遊び場）

場所	A	B	C	D	計
自分の家(内)	22 (39.3)	8 (16.3)	6 (13.3)	10 (40.0)	46 (26.3)
友達の家(内)	9 (16.1)	21 (42.9)	11 (24.4)	7 (28.0)	48 (27.4)
公 園	17 (30.4)	16 (32.7)	16 (35.6)	2 (8.0)	51 (29.1)
空 き 地	-	-	-	-	-
道 路	-	-	2 (4.4)	-	2 (1.1)
学校の校庭	-	-	2 (4.4)	-	2 (1.1)
プ ー ル	1 (1.8)	-	-	1 (4.0)	2 (1.1)
知り合いの家	-	-	-	-	-
自分の家(外)	2 (3.6)	1 (2.0)	3 (6.7)	1 (4.0)	7 (4.0)
友達の家(外)	-	2 (4.1)	1 (2.2)	3 (12.0)	6 (3.4)
そ の 他	5 (8.9)	-	4 (8.9)	1 (4.0)	10 (5.7)
不 明	-	1 (2.0)	-	-	1 (0.6)

や地域環境にはかなりの違いがあることや、来館児童の年齢や性などによる違いが、こうした館による違いをもたらしていると考えられるが、全体を通じて言えることは、やはり家の中での遊びが公園を除き圧倒的に多いということである。自分の家と友達の家、公園以外の子どもの遊び場は、今回の調査地域では殆んどないといっよい状況である。

○学習塾やけいこ事へ通う子ども(表14)

表14 学習塾・けいこごと

館	答	通っている	いない	以前通っていた	不明
A		45(80.4)	11(19.6)	-	-
B		40(81.6)	8(16.3)	1(2.0)	-
C		33(73.3)	12(26.7)	-	-
D		20(80.0)	4(16.0)	-	1(4.0)
計		138(78.9)	35(20.0)	1(0.6)	1(0.6)

児童館に来ている殆んどの子どものがやはり学習塾やけいこ事へ通っており、通っていないものは約2割という数である。

○塾などに通う回数(表15)

殆んど毎日、というものも約1割みられるが、1回～2回というものが過半数を占めている。3～4回も3割

表15 通塾回数(週あたり)

館	回数	1～2回	3～4回	ほとんど毎日
A		25(55.6)	15(33.3)	5(11.1)
B		23(57.5)	13(32.5)	4(10.0)
C		16(48.5)	10(30.3)	7(21.2)
D		15(75.0)	4(20.0)	1(5.0)
計		79(57.8)	42(30.4)	17(12.3)

表16 誰と遊びますか

館	相手	ひとりで	きょうだいと	友達と	親と	その他	不明
A		3(5.4)	5(8.9)	45(80.4)	1(1.8)	2(3.6)	-
B		3(6.1)	1(2.0)	44(89.8)	-	-	1(2.0)
C		5(11.1)	2(4.4)	37(82.2)	-	1(2.2)	-
D		-	1(4.0)	22(88.0)	-	2(8.0)	-
計		11(6.3)	9(5.1)	148(84.6)	1(0.6)	5(2.9)	1(0.6)

という数字であるが、いずれにしてもこのように多くの塾やけいこ事に通う子どもの場合、その時間的、経済的負担は大変なものであろう。

○日常誰と多く遊ぶか(表16)

日常の遊び相手と友達が多いのは当然であろうが、きょうだいと遊ぶのはごく僅かである。更にひとりで遊ぶと答えたものがC児童館の場合5名いるが、こうした子どもこそ問題といえと同時に、児童館の存在が大きな意味をもつといえよう。

○児童館への希望(表17)

児童館へ何を望むかについて聞いたのが表17であるが、テレビゲームやファミコンのある児童館という答えが最も多く、約3割の子どものがそうした要求を示していた。次いで広い場所、いろいろ遊び道具があるなどという希望が多くみられ、本や行事についての希望をあげたものは予想以上に少なかった。又、遊んでくれる人、つまり遊びの指導者についての希望をあげたものも僅か3名と少なかった。やはり「物」への期待と広さへの希望が、児童館への子ども達の要望の殆んどなのである。

○一番楽しい場所(表18)

日常生活の中で一番楽しい場所としては、友達の家、児童館、外の遊び場、学校などが多くあげられており、自分の家の中をあげるものは僅か5%という数である。しかし、実際には家の中で遊ばざるをえない子どもが多いところに現在の子どもの生活の問題があるわけである。

以上、A B C Dの4児童館で行った面接質問調査の結果について述べたが、更にこの中のA児童館については、その調査結果についてくわしい分析を行い、その現状や問題点などについて明らかにした。

A児童館は、館長の他に児童厚生員2名とパートの指導員1名の職員がおり、学童クラブも行っており、年間の利用者数が3万人近い地域児童館である。A児童館の活動目標は、多くの地域の方々と手を携え、地域の子どものがより健やかに育つことができる地域づくり、児童館

表17 児童館への希望

希望	A	B	C	D	計
いろいろな遊び道具がある	11 (19.6)	10 (20.4)	6 (13.3)	2 (8.0)	29 (16.6)
マンガや本のある	4 (7.1)	1 (2.0)	1 (2.2)	2 (8.0)	8 (4.6)
テレビゲームやファミコンのある	16 (28.6)	17 (34.7)	14 (31.1)	4 (16.0)	51 (29.1)
遊んでくれる人のいる	2 (3.6)	—	1 (2.2)	—	3 (1.7)
自由に遊べる	4 (7.1)	3 (6.1)	1 (2.2)	5 (20.0)	13 (7.4)
友達のたくさんいる	1 (1.8)	3 (6.1)	1 (2.0)	2 (8.0)	7 (4.0)
広い場所のある	10 (17.9)	11 (22.4)	11 (24.4)	6 (24.0)	38 (21.7)
いろいろな行事のある	1 (1.8)	—	—	—	1 (0.6)
その他	7 (12.5)	4 (8.2)	10 (22.2)	4 (16.0)	25 (14.3)

表18 一番楽しいところ(場所)

場所	B	C	D	計
家の中	7(14.3)	—	1(4.0)	8(4.6)
学校	8(16.3)	2(4.4)	6(24.0)	16(9.1)
友達の家	16(32.7)	15(33.3)	6(24.0)	37(21.1)
児童館	4(8.2)	13(28.9)	9(36.0)	26(14.9)
外の遊び場	11(22.4)	4(8.9)	3(12.0)	18(10.3)
学習塾	1(2.0)	1(2.2)	—	2(1.1)
その他	1(2.0)	10(22.2)	—	11(6.3)
不明	1(2.0)	—	—	1(0.6)

* (Aは調査せず)

づくりであり、年間の行事なども各種のものを地域の人々の協力の下に多く行っている。

まず今回の調査対象についてみると、7歳児が一番多く、全体の26.8% (15名)で、ほぼ3人に1人になっている。次いで6・8・10歳児の8名 (14.3%)である。(表19)

性別では男児が22名 (39.3%)、女児34名 (60.7%)で、男女の比は4:6となっている。

1週間あたりの来館回数は、(表20)のように、ほとんど毎日来館する児童が半分の28名おり、3~4回の12名を含めると、約7割 (71.4%)の40名がよく利用していることがわかる。

この児童館が楽しいことでは、①自由に遊べることをあげている子どもが21名 (37.5%)で、次に「友達と遊べる」10名 (17.9%)、「遊ぶ道具がある」6名 (10.7%)と続いている。なお「その他」9名のうち「工作、図工ができる」ことが楽しいと回答している子どもが5名含まれていた。(表21)他は「ひまだから」「おもしろくない」が各1名ずつで、不明が2名である。

表19 年齢構成

	名	%
① 7歳	15名	(26.8)
④ 6歳	8名	(14.3)
8歳	8名	(14.3)
10歳	8名	(14.3)
⑤ 9歳	6名	(10.7)
⑦ 11歳	4名	(7.1)
12歳	4名	(7.1)
⑨ 13歳	3名	(5.4)

表20 来館回数

① ほとんど毎日	28名	(50.0)
② 3~4回	12名	(21.4)
③ 1~2回	8名	(14.3)
⑤ ほとんど行かない	4名	(7.1)
わからない	4名	(7.1)

表21 児童館で楽しいこと

① 自由に遊べること	21名	(37.5)
② 友達と遊べること	10名	(17.9)
③ 遊び道具がある	6名	(10.7)
④ 好きな本が読める	5名	(8.9)
⑤ 行事に参加できる	3名	(5.4)
⑥ 児童館が楽しい	2名	(3.6)
⑦ その他	9名	(16.1)

次に、来館時に異年齢の子ども同士で遊ぶかどうかについては、(表22)となっており、7割以上(76.8%)

表22 異年齢の子どもとの遊び

- ① よく遊ぶ 43名 (76.8)
- ② あまり遊ばない 13名 (23.2)
- ③ 遊ばない 0名 (0.0)

にあたる43名の子どもがよく遊んでいると回答している。地域における子どもの異年齢集団ができてくくなっている今日、A児童館の活動の成果として評価できる結果となっている。そのうち、年下、年上の両立の子どもと遊んでいる子どもが18名で41.9%を占め、どちらか一方とが各々12名ずつの21.4%となっている。「よく遊ぶ」43名対象、「わからない」が1名

また、近年では子どもの遊び集団が少数化しているが、このA児童館の子ども達の多くは、5人以上が30名で過半数を越え(53.6%)、3~4人は17名(30.4%)で両方あわせると8割以上が3~5人の集団で遊んでいることがわかる。(表23)

表23 遊ぶ子どもの人数

- ① 5人以上と 30名 (53.6)
- ② 3~4人と 17名 (30.4)
- ③ 2人と 7名 (12.5)
- ④ ひとりで 2名 (3.6)

A児童館では、「地域の子どものつながり」と「子ども集団の育成」(2)を目的に行事を取り入れているが、この行事について子ども達の意見を聞いてみた。

児童館の行事に「よく参加する」子どもは24名で42.9%、「あまり参加しない」が20名で35.7%、「楽しい行事の時だけ」が11名で19.6%となっている。(表24)

表24 児童館の行事への参加について

- ① よく参加する 24名 (42.9)
- ② あまり参加しない 20名 (35.7)
- ③ 楽しい行事の時だけ 11名 (19.6)
- ④ わからない 1名 (1.8)

行事に「あまり参加しない」理由としては、①「楽しそうな行事がないから」が15名(75.0%)で一番多く、他の「時間がない」2名(10.0%)、「遠い」1名(5%)子どもより際立っている。(その他「わからない」が2名いる)

これを更に男、女児別にみると、(表25)となっている。それによると、女児の方の参加率が高く、逆に男児のそれは低くなっている。特に、その理由を男児の86.7%にあたる13名は「おもしろそうな行事がない」を挙げ

ている。

年齢別に(①6~8歳、②9~11歳、③12~13歳の三つに大別)みると(表26)、行事への参加率は、年齢が高くなるにしたがって低くなっている。

表25 児童館の行事への参加について

参加性別	よく参加する	楽しい行事のとき	あまり参加しない	わからない
男児	6(27.3)	1(4.5)	15(68.2)	-
女児	18(52.9)	10(29.4)	5(14.7)	1(2.9)

理由：「あまり参加しない」と回答した児童のみ(20名)

理由性別	時間がない	おもしろそうな行事がない	遠いから	わからない	計
男児	2(13.3)	13(86.7)	-	-	15
女児	-	2(40.0)	1(20.0)	2(40.0)	5

表26 年齢別

参加年齢別	よく参加する	楽しい行事のみ	あまり参加しない	わからない
6~8歳	18(58.1)	6(19.4)	6(19.4)	1(3.2)
9~11歳	6(33.3)	3(16.7)	9(50.0)	-
12~13歳	-	2(28.6)	5(71.4)	-

次に、児童館に来るようになって、友達が多くなったかどうかについては、(表27)に表されるように、「かわらない」が55.4%(31名)と過半数を占め、逆に「多くなった」と回答した子どもは23名(41.1%)であった。これを男、女児別にみると、男児に「かわらない」が多く(15名68.2%)、女児に「多くなった」(18名52.9%)とする割合が高くなっている。(表28)また、年齢別に

表27 友だちの数

- ① かわらない 31名 (55.4)
- ② 多くなった 23名 (41.1)
- ③ いいえ 2名 (3.6)

表28 男・女児別

友人数性別	多くなった	いいえ	かわらない	計
男児	5(22.7)	2(9.1)	15(68.2)	22
女児	18(52.9)	-	16(47.1)	34

みると、年齢が低いほど友達の数が多くなり、高くなるにつれてかわらなくなっている。(表29) この結果に限ってみると、児童館に来館して友達が増える子どもは、年齢の低い女児に多く、反対に友達の数に変化がないのは、男児で年の上の子に多いという特徴がみられる。

表29 年齢別

年齢別 \ 友人数	多くなった	いい	え	かわらない	わからない
6～8歳	17(54.8)	-	14(45.2)	-	-
9～11歳	6(33.3)	1(5.6)	11(61.1)	-	-
12～13歳	-	1(14.3)	6(85.6)	-	-

児童館に行かない時の子どもの生活=遊びの拠点については、自宅の中で遊ぶケースが約4割で(22名 39.3%)と多く、続いて公園の17名(30.4%)、友達の家(中)が9名(16.1%)となっており、公園などの戶外遊びに比べ自宅および友達の家(中)といった室内遊びが半数を越えるなど、遊び空間の少ない都市部における子どもの生活の一端が表われた結果となっている。また、「その他」として、中学生にゲームセンターを遊び場に挙げている子どもが4名程みられた。

また、今日では子どもの塾通いや何らかのけいこ事に通う姿は決してめずらしくない。この地域に住む子ども達も同様で、8割が学習塾ないしはけいこ事に通っていると回答している。そこで、児童館への通館と学習塾、けいこ事との関連をみると、(表30)に示されているように、学習塾、けいこ事に通っている子どもは児童館にもよく来館する傾向がみられる。したがって、児童館に来なくなる理由に、この通塾やけいこ事はこの地域の子どものみに限ってみると直接的な関連はなく、むしろ、他の理由によるものと思われる。

表30 学習塾・けいこごとの関連

児童館 \ 学習塾	通っている
ほとんど行かない	4(8.9)
1～2回	8(17.8)
3～4回	11(24.4)
ほとんど毎日	20(44.4)
わからない	2(4.4)

このA児童館では、『活動報告集』(1990年度版)にみられるように、設立以来「子ども達に求められる児童館活動を目指し」今日に至っている。しかし、これまでの

調査報告にみられたように、そうした児童館の諸活動にもかかわらず、なお子どもの側からの不満、裏を返すと、児童館に対する更なる期待や要望の声も少なくないことが理解できよう。

そこで、子ども達の率直な意見を聞くと、(表31, 32)にまとめられる。この表によると、A児童館に対する子ども達の希望として多い順では、まずはじめに、テレビゲームやファミコンのある児童館に、との要望が高く、約3割(16名 28.6%)となっている。このテレビゲームにせよファミコンにせよ、子どもの生活と今日では切っても切れないほどの関連があることから、A児童館に限らず適切な対応が求められているといえる。次いで、遊び道具がある児童館を子ども達は期待している。(11名, 19.6%)これは先のテレビゲームなども含んでいると思われるが、いずれにしても子ども達は、いろいろな遊び道具のある児童館に関心があるといえそうである。また、「もっと広い場所のある」児童館を、という希望は都会にある児童館すべてにあてはまることかもしれない。この他にも「マンガや本のある」、「自由に遊ばせてくれる」児童館を子ども達は求めている。しかし、このA児童館に限らず、殆どどの児童館で実施されているさまざまな催しや活動といった行事に対する要望は少なく、児童館側の努力にもかかわらず、子ども側からの期待は少ないとみる方が妥当のようである。この他、プールのある、いつでも工作ができる(各2名ずつ)、目的に合った部屋のある、ジュースや菓子があって寝られる(各1名ずつ)児童館を、といった意見が散見された。(表31)これを性別でみると(表32)のようになる。それによると、男児にテレビ、ファミコンのある、女児にたくさんの遊具のある児童館を求める声が高いことがわかる。また、「もっと広い場所のある」児童館にたいしては、男女共に希望が少なくない。

また、更に児童館を利用する子ども達を、便宜上3つに分けてその希望をみたものが(表33)である。回答数にバラツキがあるため一概には言えないが、どちらかと

表31 児童館にたいする希望

- ① テレビゲームやファミコンのある … 16名 (28.6)
- ② 遊び道具のある …………… 11名 (19.6)
- ③ もっと広い場所のある …………… 10名 (17.9)
- ⑤ マンガや本がたくさんある …………… 4名 (7.1)
- もっと自由に遊ばせてくれる …………… 4名 (7.1)
- ⑥ 一緒に遊んでくれる人のいる …………… 2名 (3.6)
- ⑧ 仲のよい友達のいる …………… 1名 (1.8)
- いろいろな行事のある …………… 1名 (1.8)
- ⑨ その他 …………… 7名 (12.5)

表32 児童館にたいする希望 一男・女別

内 容	男児	女児
① テレビやファミコンのある	11 (50.0)	5 (14.7)
② もっと遊び道具のある	1 (4.5)	10 (29.4)
③ もっと広い場所のある	5 (22.7)	5 (14.7)
④ マンガや本がたくさんある		4 (11.8)
⑤ もっと自由に遊ばせてくれる		4 (11.8)
⑥ 一緒に遊んでくれる人のいる		2 (5.9)
⑦ 仲のいい友達がいる	1 (4.5)	
⑧ いろいろな行事のある		1 (2.9)
その他	4 (18.2)	3 (8.8)
計	22 (100.0)	34 (100.0)

いうと、よく児童館を利用する子どもに、多様な要望があることがわかる。

この他、このA児童館に通う子ども達に今、一番したいこと、一番欲しいものを聞いてみた。それによると、一番したいことでは、ゲームやテレビ視聴など内遊びが多く、外遊びの21名(37.5%)を上回っていた。この二つの事項以外で気になることがらとして、「誰か(児童館に来る子)をいじめたい」と回答した子どもがわずかではあるが5名(8.9%)いたことである。(表34)

最後に、欲しいものとしては室内遊具、例えばテレビゲームのソフトなどを挙げている子どもが多く、

24名(42.9%)に達していた。以下(表35)の通りであり、きわめて身近かで入手し易いものから夢に近い(サッカー場)ものまで実にさまざまであった。なかでも、最近では金持ちになったといわれる現代っ子の「お金」への欲求が全体の8.9%(5名)であったことを、少ないとみるべきか否かは判断が難しい。しかし、いずれにしても全般に室内での遊び指向がここでもはっきり表われていたと言っても過言ではなさそうである。

以上A児童館に来館する子ども達の調査結果をみると、調査対象児童数が少ないので難しい側面もあるが、全体的には館活動を通して地域の子ども、特に年齢の低い層に支持されている。しかし他方で、行事への参加にたいする意識はそれ程高くなく、子ども達が求めている要求との間にギャップがみられた。

今後は、地域に根ざした子どもへの生活拠点として多様なニーズに応える児童館づくりが期待されているといえよう。

表34 一番したいこと

① 内遊び関係	24名(42.9)
② 外遊び関係(運動・スポーツを含む)	21名(37.5)
③ いろいろ遊びたい	5名(8.9)
反社会的(人をいじめたい)	5名(8.9)
⑤ わからない	1名(1.8)

表35 一番ほしいもの

① 室内遊具関係	24名(42.9)
② 本	7名(12.5)
③ 運動・スポーツ用品	6名(10.7)
④ お金	5名(8.9)
⑤ ペット・飼育関係	4名(7.1)
⑥ 運動設備(野球場、サッカー場など)	3名(5.4)
⑦ なし	1名(1.8)
⑧ 不明	1名(1.8)
⑨ その他	5名(8.9)

表33 児童館にたいする希望 一來館回数別

希 望	來館回数		
	ほとんど毎日	ほとんど行かない	1~2回
① もっと広い場所のある ファミコンやテレビゲームのある	6(21.4) 6(21.4)	1(25.0) -	- 3(37.5)
③ もっといろいろ遊び道具のある	5(17.6)	1(25.0)	4(50.0)
④ もっと自由に遊ばせてくれる	3(10.7)	1(25.0)	-
⑥ たくさんマンガや本のある、 いっしょに遊んでくれる人のいる いろいろな行事のある	2(7.1) 2(7.1) -	1(25.0) - -	- - 1(12.5)
その他	4(14.3)	-	-

調査2)について

調査2)の対象である奈良県のN市の中心地区にあるH児童センターは、昭和55年に建設された民間の児童厚生施設であり、周囲は特別保存地区に指定されているため、自然に非常に恵まれた環境にある。最寄りの民家までの距離が500mもあるというが、半径3,000m以内に6校の小学校と幼稚園があり、児童総数は約5,000名である。

運営主体はF社会福祉法人であり、センター長を含む職員3名で運営されている。休館日は毎週月曜日、祭日の翌日、年末年始の12月29日～1月4日である。開館時間は午前8時30分～午後5時までであるが、野外活動団体利用時の場合は24時間である。

公的な補助金は国・県・市から年間300万円ほどであり、これは年間60万円ほどの借地代など維持管理費に使用している。2名の厚生員の人件費は企業寄付200万円、キャンプ代200万円、合宿などの事業収入200万円、本部よりの100万円などからまかなわれている。

② Hわんぱく村

児童センター設立当初は、地域の要望に応じられず、また要望がいかなるものか知ることもできず、主に野外活動訓練施設としての機能のみを果していた。しかし、子ども達が自分の責任においてやってみたいことを自由に取り組みたいという信念のもとに昭和58年、組織した第1期「Hわんぱく村」には、小学1年生から中学2年生まで300名を越える応募があった。そこでこの村を児童センターの核として地域との連携を始めることとなった。

「わんぱく村」を設立するにあたっては、まず村民の子どもを募集しなければならない。この手段として「N市民だより」の掲載の他、新聞社を直接訪問して「村」の設立意義を理解してもらい、記事にしてもらった。そして300人以上からの申し込みがあり、村の役員は総会で早々と決った。しかし、具体的な活動内容を話し合う時になると、スムーズには運営できなかった。

看板だけは大きくできあがったので開村式となった。すると新聞社やテレビ局までが「Hの地に子どもの独立国」とか「子ども達の自治国家の誕生」として取材の競争合戦が始った。まだ何の活動も始めていないのに、このことが村の児童を錯覚に陥し入れ、自分達は特別な集団であると思込ませてしまったようである。

以上のことをきっかけに、シャベルで山の土を掘り起こして畑を作り、農作業をしたり、イカダを作り児童センターの池の島へ渡ったりするようになった。このような活動目標を達成させるためには、子ども自身が十分な汗を流せるような環境と素材を提供したり、見え隠れす

るところに大人の適切な指導力が要求される。大人も一緒に楽しもうとする姿勢と、あまり教え込もうとしない(安全面を除いて)ことを心がけて成功していったようである。



③ 無人島生活体験

無人島の京都府の日本海沖の「T島」に平成元年7月、3泊4日でサバイバルキャンプを実施した。児童センター職員3名の他、成人ボランティア3名、わんぱく村OB高校生1名を加え、小学3年生から中学生までの男女52名を引率した。キャンプの道具や食料は持っていき、子ども達を5人ごとのグループに分け、安全教育だけは行った後、特に何も規制はせず、食事も自分達で好きなように作らせた。キャンプを自分達で作らなければならないという気持ちを子ども達に自然におこさせ、自分で食事を作らなければ空腹になることを実感させて、何ごとも自由にまかせて生活を体験させた。豊かな現代社会の中では、とかく忘れがちな衣食住の大切さについて、子ども達に体験を通して学ばせるのがキャンプの目的である。

以上の活動をみてもわかるように、H児童センター長は、子どもの健全育成に非常に熱意のある人であり、自分の信念や活動の内容について熱っぽく語ってくれた。②③で述べた以外にも様々な活動を行っている。この児童センターの自然環境は、都会ではまねできない豊かなものであるが、やはりそれを生かすためには、意欲的な指導者が必要であろう。指導者といっても、子ども自身も持っている遊び心や探究心をそれとなく引き出してくれる人であり、子ども自身の責任で自由を保証する人である。現在の子供達は、大人からの指示を待っている子が多く、すぐ物事にあきてしまいかちであるが、子どもが思いつくままに、考えたように、とにかく実践させる、こうした指導は極めて有意義な活動といえよう。

設立当初、地域に認知されず、特に地域からの要望で行われた児童センターの活動ではないが、マスコミを利用することによって地域に知らせ、子ども達に意欲をわかせる、種々の活動に結びつけていったことは大いに評価される。将来はHわんぱく村で育っていった子ども達が青年、成人になって、この児童センターの活動を引きついでくれることが期待される。

おわりに

今回の調査は、最初にも記したようにあくまでも現在の子も達の地域における生活拠点の再構築を通じて、地域における充実した遊びの活性化をめざした研究の準備段階ともいえるものである。したがって、調査の対象も児童館にしぼりこみ、主として来館児童を対象としたものに終わってしまったが、次の段階では更に調査地域を拡

げると共に、地域住民や健全育成施設の職員や、関連する教育、保健、建設などの分野の人々を対象にした調査を行い、より総合的に問題を捉え、将来に向けての方策についての提言も行う予定である。

参考文献

- 1) 『日本子ども資料年鑑』日本総合愛育研究所編
- 2) 『児童館活動事例集Ⅰ 伸びゆく児童館』全国児童連合会
- 3) 『児童館活動事例集Ⅲ 児童館の轍』全国児童館連合会
- 4) 子ども家庭情報 特集子どもをめぐる環境 Vo14. 母子愛育会
- 5) 子どものための地域づくり 大村虔一他 晶文社
- 6) 児童館と地域の児童健全育成活動全国児童館連合会